

少年たち

МАЛЬЧИКИ

アントン・チェーホフ Anton Chekhov

青空文庫

「ヴオローヂヤが帰ってきた！」と誰かがおもてで叫んだ。

「ヴオローヂヤちゃんがおつきになりましたよ！」と、食堂へかけこみながら、ナターリヤが叫んだ。「ああ、よかった！」

かわいいヴオローヂヤの帰りを、今か今かと待っていたコロリヨーフ家の人びとは、みんなわれがちに窓べへかけよった。車よせのところに、幅の広いそりがとまっている。三頭立ての白い馬からは、こい霧がたちのぼっていた。そりは、からっぽだった。というの
は、早くもヴオローヂヤが玄関さきにおり立って、赤くかじかんだ指さきで頭巾ずきんをほどき
にかかっていたからだ。彼の中学生用の外がい套とうも、帽子も、オーバーシューズも、こめか
みにたれさがった髪の毛も、すっかり霜をかぶって、頭のてっぺんから足のさきまで、そ
ばで見ている者のほうがぞくぞく寒けがしてきて、思わず、『ぶるるる！』と言いたくな
るような、すばらしくけっこうな寒さのおいをはなっていた。お母さんかあとおばさんは、
さつそくヴオローヂヤにだきついてキツスをした。ナターリヤは、かれの足もとにかがみ
こんでフェルト靴をぬがせ始め、妹たちは金切り声をあげた。あっちこちの扉がきしみ、
ばたんばたんとつと音をたてた。その中を、ヴオローヂヤのお父さんとうが、チョッキすがたで手

にはさみを持ったまま玄関へかけてきて、びっくりしたように叫びだした。

「きのうから、みんな待ってたんだよ！ 途中、変わったことはなかったかい？ ぶじだったんだね？ どれどれ、ひとつ親子の対面をさせてもらおうか！ はてな、わしは父親ではないのかい！」

「わん！ わん！」と、ひどくからだの大きな黒犬のミロールが、しつぽで壁や家具をたたきつけながら、太い声でほえた。

ものの二分ばかり、あたり一面わあつという喜びの声に包まれた、その喜びのあらしがおさまると、コロリヨーフ家の人びとは、ヴォローヂャのほかにもうひとり、えりまきや頭巾をつけて、やはり、霜をかぶった少年が玄関にいるのに気がついた。彼は、すみのほうの、大きなきつねの外套が投げかけている影の中に、身動きもしないで、じつと立っていたのだ。

「ヴォローヂャちゃん、こちらのお坊ちゃんは、どなた？」と、お母さんが小声でたずねた。

「ああ、そうそう」と、ヴォローヂャはやつと思いだしたように言った。「これはね、お友だちのチエチエヴィーツイン君、二年生なんです。……うちへお客に来てもらったの。」

「それはそれは、よく来てくださった！」と、お父さんはうれしそうに言った。「すみませんね、こないいかつこうで……さあ、どうぞ、どうぞ！ ナターリヤ、チェレピーツインさん（名まえをまちがえて呼ぶのはたいへん失礼なことである）の外套をお取りして！ やれやれ、この犬を追っぱらわにや、まったくこまったやつだ。」

しばらくすると、このそうぞうしい出迎えを受けて、ぼっとなったヴォローヂャと友だちのチエチエヴィーツインは、寒さのためにまだ赤い顔をしたまま、食卓について、お茶を飲んでいた。雪と窓ガラスの霜の花をとおしてさしこんだ冬の太陽が、サモワールの上でちらちらし、そのすがすがしい光が、フィンガー・ボールの中で水あびしていた。部屋は暖かかった。少年たちは、こおったからだの中で、暖かさと寒さがたがい負けまいとして、くすぐりあうのを感じていた。

「もうじき、またクリスマスだね！」と、お父さんは、こい茶色のタバコを紙に巻きながら、うたうように言った。「この夏、お母さんがおまえを見送りに行つて泣いたのが、ついきのうのような気がするのに、もうおまえが帰ってきた。……時のたつのは早いもんだ！ またたくまに年をとつてしまうよ、チービソフさん（ここでも名まえをまちがえている）どうか遠慮せんで、どんどん、食べてください！ なんにも、おかまいはしませんか

ら。」

十一を頭に三人いるヴオローヂャの妹たち——カーチャと、ソーニヤと、マーシヤは、食卓に向かつているあいだじゅう、この新しいお友だちから目をはなさなかった。チエチエヴィーツインは、年まわりといい、背たけといい、ヴオローヂャとそっくりだった。ヴオローヂャのようにまるまるとふとつてもいなければ色白でもなく、やせて、浅黒く、そばかすだらけの顔をしていた。髪の毛はごわごわだし、目は細いし、くちびるはぶあつしいし、つまり、ひどくみにくい少年だった。もし、中学生の短い上着を着ていなかったら、ちよつと見たところ料理女の息子とまちがわれそうなほどだった。むずかしい顔をしていてもだまりこみ、笑顔ひとつ見せない。少女たちは、彼を見るなり、これはきつとたいへん利口な、勉強のよくできる人にちがいない、と想像した。彼は、しよつちゅう何か考えていた。そして、あまり夢中になって考えこんでいたので、何かきかれると、はつとして頭をふり、もう一度言ってもらいたいとたのむのだった。

そのうえ少女たちは、陽気でおしやべりのヴオローヂャまでが、きょうにかぎって口数が少なく、ほとんど笑顔も見せず、うちへ帰ってきたことを喜んではないような様子なのに気がついた。お茶を飲んでるあいだじゅう、彼が妹たちに話しかけたのは、たった一

回きりで、それもなんだが妙なことを口にしただけだった。彼は、サモワールを指さしながら、

「カリフォルニアじゃ、お茶のかわりにジンを飲むのさ」と言ったのである。

ヴォローヂャも、夢中で何か考えていた。彼がときどき友だちのチエチエヴィーツインと見かわす目つきから察すると、ふたりの少年は同じことを考えていたらしい。

お茶がすむと、みんなはそろって子ども部屋へひきあげた。お父さんと少女たちは机に向かつて、少年たちの到着でやりかけになっていた仕事にとりかかった。みんなは、いろいろな色紙でクリスマス・ツリーを飾る花やふさをつくっていたのだ。これは、ひじょうに楽しい、そうぞうしい仕事だった。新しい花が一つしあがるたびに少女たちは、喜びの叫びを、——そればかりか、まるで、その花が空からふってでもきたかのように、いっせいに驚きの叫びをあげた。お父さんまで、この仕事にすっかり夢中になって、はさみがよく切れないのでぷりぷりして、ときどき床へ投げつけた。お母さんは、ひどく心配そうな顔をして子ども部屋へかけこみ、こうたずねた。

「あたしのはさみを持って行ったのは誰なの？ イワン・ニコラーイチ、またあなたは、あたしのはさみを持っていらしたのね？」

「やれやれ、はさみ一つ貸さないんだからなあ！」——イワン・ニコラーイチは、泣き声でこう答えると、いすの背にもたれて、ちよつとしよげきつたふりをしたが、すぐにまた仕事に夢中になった。

これまでは、ヴォローヂャも家へ帰ると、クリスマス・ツリーの用意をしたり、ぎよしゃ馭者や牛飼いが雪の山をつくるのを見に、庭へ走って行ったりしたものだった。ところが、このときは、彼もチエチエヴィーツインも、色とりどりの色紙に見向きもしなければ、一度もうまやには顔をださないで、窓ぎわに腰をおろすなり、なにかしきりにひそひそ話をし始めた。それから、彼らは地図の本を開いて、どこかの地図をしらべにかかった。

「まず、ペルミへ行くんだ……」と、チエチエヴィーツインが小声で言った。「そこから、チユメーン。……それから。……トムスク。……それから……カムチャツカ。……そこからは、サモエードがボートでベーリング海峡をわたしてくれらあ。……そうすりや、もうアメリカだ。……アメリカにや、毛皮の取れるけだものがたんといるんだぜ。」

「カリフォルニヤは？」と、ヴォローヂャがきいた。

「カリフォルニヤは、もつと下のほうさ。……とにかくアメリカへ行きさえすれば、カリフォルニヤだつてもう目と鼻のさきだ。食べものなら、狩りをしたり、かっぱらいをすれ

ばいいんだからね。」

チエチエヴィーツインは、一日じゆう少女たちをさけて、額ひたいごしにじろりじろりとみんなをながめていたが、夕がたのお茶がすんでから、五分ほど彼ひとりきりで、少女たちの中にとり残されたことがあった。だまつているのもきまりがわるかった。そこで彼は、あらあらしくせきを一つして、右手の手のひらで左手をこすり、気むずかしそうにカーチャを見ながらたずねた。

「メイン・リードの小説、読んだことがある？」

「いいえ、読んだことありません。……ねえ、チエチエヴィーツインさん、あなた、馬に乗れるの？」

自分ひとりの考えにふけっていたチエチエヴィーツインは、この質問には答ええないで、ただぶつと頬をふくらませ、暑くて暑くてたまらないとでも言うようにため息をついた。彼はもう一度、カーチャのほうに目をあげて言った。

「野牛のむれが、アメリカの大草原を走ると地面がふるえるもんだから、野生の馬がびつくりして、はねまわったり、いなないたりするんだよ。」

チエチエヴィーツインは、悲しそうにほほえんで、つけくわえた。

「それから、インディアンが汽車をおそう。でも、いちばん手におえないのは、蚊と白ありさ。」

「白ありつて、なあに？」

「ありの一種でね、ただ、羽がはえている。ひどくきすんだよ。ねえ君、君は僕がだれだか知ってる？」

「チエチエヴィーツインさんでしょう？」

「ちがうんだ。僕はね、モンチゴモ・ヤストレビヌイ・コゴツチさ、降参しない土人の酋しゅ長ゆうちょうの。」

末の妹のマーシャは、しばらく彼の顔を見つめていたが、それから、とつぷりと暮れた窓のほうをながめて、考えながら言った。

「うちじや、チエチエヴィーツ（そら豆）は、きのうこしらえたわ。」

チエチエヴィーツインの、何が何やらまるでわからない言葉といい、彼がたえずヴオローチャとひそひそ話をしていいことといい、ヴォローチャが遊びもしないで、しよつちゆう、何か考えこんでいることといい、——こうしたことは、みんなひどく謎めいていて、奇妙だった。そこで、上のふたりの娘のカーチャとソーニャは、注意ぶかく少年たちを見

守り始めた。夜になって、少年たちが寝に行くと、このふたりの娘は扉にしのびよって、彼らの話をぬすみ聞きした。ああ、少女たちは何を知っただろう？ 少年たちは、どこかアメリカあたりへひと走り行って、金鉱を掘りあてるつもりでいたのだ。途中の用意は、何から何までできていた。ピストルが一ちよう、ナイフが二つ、ビスケット、火をつくる拡大鏡、コンパス、お金が四ルーブル——これが、持ちもののすべてである。少女たちは、また少年たちが数千里もの道のりをてくてく歩いて行かなければならないことや、途中、虎や野蛮人とたたかい、それから、金や象牙きんぞうげを手に入れたり、敵をころしたり、海賊のなかまにはいたり、ジンを飲んだりしながら、最後には美しい女の人と結婚をして、農場をこしらえたりしなければいけないことを知った。ヴォローヂャとチエチエヴィーツインは、話をしながら夢中になって、おたがいにあいての話をさえぎりあつた。そして、そんなとき、チエチエヴィーツインは自分を《モンチゴモ・ヤストレビヌイ・コゴツチ》と呼び、ヴォローヂャのことを《顔の青い兄弟》と呼んだ。

「あんた、よくつて、ママにお話ししちやだめよ」と、いっしょに寝に行きながら、カーチャがソーニャに言った。「ヴォローヂャは、アメリカから、あしたちに金や象牙を持って帰ってくるのよ。あんたがママに話したら、ヴォローヂャは行けなくなるんだから。」

クリスマスの前々日。チエチエヴィーツインは、一日じゆうアジアの地図をしらべながら、何かしきりに書きこんでいた。一方ヴオローヂャは、元氣のない、蜂はちにさされたような、むくんだ顔つきで、ゆううつそうに部屋の中を行ったり来たりしているばかりで、何ひとつ食べなかつた。一度など、彼は子ども部屋の聖像の前に立ちどまって十字を切り、こんなことを言いさえした。

「神さま、どうぞ、罪ぶかい僕をおゆるしくください！ 神さま、僕のかわいそうな、ふしあわせなお母さんをお守りください！」

夕がたになると、ヴオローヂャは、しくしく泣きつづけた。寝に行くとき、彼は長いことお父さんやお母さんや妹たちをだきしめた。カーチャとソーニャは、そのわけを知っていたが、すえつ子のマーシャは、なんにも——ほんとに、なんにも知らなかつたので、チエチエヴィーツインの顔を見て考えこみ、ため息をつきながら、こんなことを言った。

「ばあやが言ったけど、精進期しょうじんきには、えんどうやチエチエヴィーツ(そら豆)を食べなければいけないですって。」

クリスマスの前の日の朝早く、カーチャとソーニャは、そっと寢床から起きて、少年たちがアメリカへ逃げだすようすをのぞきに行った。ふたりの少女は、とびら口へしのびよ

った。

「じゃ、君は行かないんだね？」と、チエチエヴィーツインが、ぶりぶりしながらたずねた。「はつきり言えよ、行かないんだね？」

「だってさ、」ヴオローチャはしくしく泣いていた。「どうして僕、行けるだろう？ ママがかわいそうなんだもの。」

「顔の青い兄弟、おねがいだから、いっしょに行こうよ！ もともと、君は、だんぜん行くと言つて、僕をさそつたんじやないか。それを、いぎ出かけるときになつて、今さらしりごみするなんて！」

「僕……僕、しりごみなんかしてないよ。ただ、僕……ママがかわいそうなんだ。」

「行くのか、行かないのか、はつきり言えよ。」

「行くよ。ただ……もう、ちよつと待つてくれよ。僕うちにいたいんだ。」

「そんなら、僕ひとりで行く！」と、チエチエヴィーツインは言いきつた。「君なんかいなかったつて、こまるもんか。今までにだつて、僕は虎狩りや戦争がしたくてたまらなかつたんだ。そんなら、僕のラツパを返してくれ！」

そのとき、ヴオローチャがはげしく泣きだしたので、妹たちも、こらえきれなくなつて、

しくしく泣き始めた。あたりは、しんと静まりかえった。

「じゃ、君は行かないんだね？」と、またチエチエヴィーツインがたずねた。

「行く……行くよ。」

「じゃ、支度をしろよ！」

そう言つて、チエチエヴィーツインは、ヴォローヂヤを説きふせるために、アメリカをほめたたえたり、虎のまねをしてほえたり、汽船の話をしたり、ののしつたり、象牙はむろん、ライオンや虎の毛皮もみんなヴォローヂヤにあげると約束したりした。

今や、少女たちには、このやせこけた、浅黒い、髪の毛のごわごわしたそばかすだらけの少年が、ほかの人たちのおよびもつかない、りっぱな人のように思われた。彼こそは、英雄であり、ものおじしない、大胆な人であった。そして、彼のほえかたは、扉の外で聞いていると、ほんとうに虎かライオンがほえているのかと思われるほどじょうずだった。

自分の寝室へ帰つて着がえをしているとき、カーチャは目にいっぱい涙をためて言った。
「ああ、あたし、とつてもこわいわ！」

二時にお昼を食べるときまでは、なにごともなくすぎたが、食事のあいだに、とつぜん少年たちが家にいないことがわかった。召使いの部屋や、うまやや、はなれの手代のところ

ろへ人をやって探したけれど——いかなかった。村へも人をやってみたが——見つからなかった。つぎのお茶も、少年たちぬきですました。晩ごはんのテーブルをかこんだときには、お母さんは心配のあまり泣きつづけた。夜になってから、もう一度、村をさがしまわり、角燈をともし川のほうまでくりだしてみた。ほんとうに大変なさわぎだった！

あくる日、巡査がやって来た。食堂で、なにやら書類をつくっていた。お母さんは、泣きどおしだった。

すると、やがて、車よせのところ幅の広いそりがとまった。三頭立ての白い馬からは、湯気が立ちのぼった。

「ヴオローチャが帰ったぞ！」と、だれかがおもてで叫んだ。

「ヴオローチャちゃんか、お帰りになりましたよ！」と、食堂へかけこみながら、ナターリヤが叫んだ。

犬のミロールドまで、太い声で、《ワン！ワン！》とほえ始めた。

少年たちは、町の宿屋でつかまったのだ。（かれらは、町を歩きながら、火薬を売っている店をきいてまわっていたのである。）ヴオローチャは、玄関へ足をふみ入れるなり、わっと泣いて、お母さんの首つ玉へかじりついた。少女たちは、からだをふるわせて、こ

れからどうなることだろう、とおそろおそろ考えながら、お父さんがヴオローヂャとチエチエヴィーツインを書斎へつれてはいり、長いこと話しているのを聞いていた。お母さんも、何か言つては泣いていた。

「よくも、こんな大それたまねができたもんだ！」と、お父さんは言い聞かせた。「万が一、学校へ知れたら、退学ものだぞ。チエチエヴィーツイン君、恥かしいことですぞ！ いかんなあ！ あんたが、張本人じゃ。きつと、親御さんから、お目玉をちようだいでるだろう。じつさい、よくもこんなまねができたもんだ！ どこで、とまったんだね？」

「駅です！」と、チエチエヴィーツインは自慢そうに答えた。

それから、ヴオローヂャは床とこについた。頭には、酢でしめしたタオルがあてられた。どこかへ電報がうたれてそのあくる日、チエチエヴィーツインの母親だという女の人がやつてきて、息子を引き取つて行つた。

チエチエヴィーツインは、たち去るとき、あらあらしい、いばりくさった顔をしていた。そして少女たちと別れるときにも、ひとことも口をきかなかつた。ただ、カーチャの手帳を取つて、記念にこう書いただけである。――

『モンチゴモ・ヤストレビヌイ・コゴツチ』

(М а л ь ч и к и , 1887)

青空文庫情報

底本：「カシタンカ・ねむい 他七篇」岩波文庫、岩波書店

2008（平成20）年5月16日第1刷発行

2008（平成20）年6月25日第2刷発行

底本の親本：「チエーホフ全集 第七卷」中央公論社

1960（昭和35）年発行

※底本の二重山括弧は、ルビ記号と重複するため、学術記号の「《》」（非常に小さい、2-67）と「《》」（非常に大きい、2-68）に代えて入力しました。

入力：米田

校正：noriko saito

2010年7月5日作成

2012年2月21日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

少年たち

МАЛЬЧИКИ

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 アントン・チェーホフ Anton Chekhov

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>